

令和6年度 大学院特別講義A・B

	A	B
1 公 募	<p>開催日時：令和6年7月26日（金）18時00分～19時00分 開催方法：教育棟2F 講堂 演 題：「体内浸透圧環境の生理的意義と細胞による感知の分子メカニズム」 講師名：名黒 功（順天堂大学薬学部 生体応答情報学教室 教授） 講演内容：水と溶質（主にNa⁺）の量のバランスで決まる浸透圧環境は、腎臓の尿産生など体内の水の輸送に必須の環境である。一方で、近年がん腫瘍部や高食塩摂取時の皮膚で高浸透圧環境が形成され、免疫細胞の機能を変化させるなど局所浸透圧環境の新しい生理・病理的意義が注目されている。演者は浸透圧応答性キナーゼASK3の解析をはじめ浸透圧環境と細胞の相互作用について分子レベルの研究を進めており、液-液相分離（LLPS）を介した浸透圧感知機構など新しい概念を提唱している。本講演では、刷新されつつある生体の浸透圧環境の意義について分子スケールの視点から最新の知見を紹介したい。 主催分野：分子遺伝医学分野</p>	<p>開催日時：令和6年7月22日（月）18時00分～19時00分 開催方法：橘桜会館2階 橘桜ホール 演 題：「米国における小児形成外科治療の現状」 講師名：山田 朗(Attending Physician, Plastic Surgery; Member, Lurie Children's Surgical Foundation/ Professor of Surgery (Pediatric Surgery) and Surgery(Plastic Surgery), Northwestern University Feinberg School of Medicine) 講演内容：山田朗教授は30年間以上にわたり臨床を続けている小児形成外科医で、特に小耳症の再建手術の専門家であり所属施設のLurie Children's Hospitalでは包括的なケアを提供しています。さらに頭蓋骨内頭蓋骨癒合症、口蓋裂、顎裂等の多くの手術を経験され、世界頭蓋顔面財団(WCF)のメディカルディレクターとしても貢献されております。またこれまでロシア、南アフリカ、アルゼンチン、オマーン、中国、メキシコを含む多くの国を訪れ、現地の外科医を教育されてきました。国内外の50以上の施設で講義もされています。さらに豊富な研究経験も持たれており、多くの論文および著作があります。本講演では「米国における小児形成外科治療の現状」という演題名でご講演頂きます。形成外科医だけではなく大学院生また国際協力活動に興味のある方に大変有意義なものになると考えます。 主催分野：形成再建再生医学分野</p>
2 委 員 指 名	<p>開催日時：令和6年7月19日（金）18時00分～19時30分 開催方法：教育棟2F 講堂 演 題：「対人コミュニケーションの障害に対する治療薬開発：自主臨床試験・医師主導治験による取り組み」 講師名：山末 英典(浜松医科大学 精神医学講座 教授) 講演内容：自閉スペクトラム症の中核症状として認められる対人コミュニケーションの障害は、一般人口の36人に1人の割合で認められるが（CDC 2023）、承認された治療法がなく、大きなアンメットニーズとなっている。 演者らは、実験動物での社会行動促進作用が確立されているオキシトシンの経鼻投与を用いて、複数の無作為割付試験を自主臨床試験および医師主導治験の枠組みで行い、臨床症状の改善に加えてその背景の脳内メカニズムについて示し、当該領域で世界をリードしてきた。講演では、これらの研究成果及び今後の開発戦略について概説する。 主催分野：薬理学分野</p>	<p>開催日時：令和6年6月1日（土）14時00分～17時00分 開催方法：教育棟2F 講堂 演題：下記参照 1.生物物理学からみた臨床医学：タンパク質ダイナミクスと細胞ダイナミクス 2.スクリーニング 検査における受検者の思い-出生前検査と大腸がん検診の調査結果から- 3.医学と人類学との対話から協働へ 4.医学生に対する「悪い知らせを伝える」コミュニケーション技術研修 5.Active Learning of English for Medical Students 講師名：下記参照 1.藤崎 弘士（日本医科大学 物理学 教授） 2.菅野 摂子（埼玉大学 ダイバーシティ推進センター 准教授） 3.浮ヶ谷 幸代（自治医科大学 医学部 客員研究員） 4.久保田 馨（日本医科大学 呼吸ケアクリニック 副所長／臨床腫瘍部門長） 5.カーク スティーブン（日本医科大学 英語 教授） 講演内容：日本医科大学の基礎科学教員を中心に、物理・化学・生物学などと医学・医療の接点を学び、お互いの知識を深める。</p>
3 公 募	<p>開催日時：令和6年6月7日(金)18時00分～19時00分 開催方法：橘桜会館2階 橘桜ホール 演 題：「医療DXの進歩と未来への展望：VRでひらく医療」 講師名：上路 健介(株式会社ジョリーグッド 代表取締役 CEO) 講演内容：医学教育や治療のデジタル化は加速している。現在ではVirtual Reality教材を用いた医学教育のみならず、うつ病やPTSDの治療機器としてもVRを活用するまでに発展している。 本講演では、演者が目指す医療DXの現状と未来像に関して情報を共有し、在宅診療がピークを迎える2040年に向け医療をより一般化していくための方略について、医療者の立場として議論する場としたい。 医療をもっと身近に感じてもらうために演者が推進している「ひらけ医療」プロジェクトについても、議論を深める予定である。 主催分野：救急医学分野</p>	<p>開催日時：令和6年9月20日（金）15時00分～16時00分 開催方法：大学院棟 演習室 1 演 題：「The Evolution of Cancer Biomarkers for Early Detection: Promises, Challenges and Hopes for the Future」 講師名：Dr. Sudhir Srivastava, Ph.D., MPH 講演内容：Srivastava博士はNational Cancer Institute Ealy Detection Research Network (NCI EDRN)を2000年に立ち上げ、その責任者として全米の研究者をネットワークしながら、米国のがん予防、早期診断バイオーカー研究を牽引されています。また、米国Cancer Moonshot 計画の一部としてPreCancer Atlas Projectを強力なリーダーシップのもと推し進め、米国がん予防研究分野のKey Opinion Leaderです。その業績により2022年にDon Listwin Award for Outstanding Contributions to Cancer Early Detectionを受賞されておられます。Srivastava博士は、第44回日本分子腫瘍マーカー研究会（大会長 本田一文）、第83回日本癌学会総会（大会長 赤司浩一教授）に発表のため、訪日されます。せっかくの機会ですので、日本医科大学大学院特別講義をお願いしたところ、ご快諾いただきました。 主催分野：生体機能制御学分野</p>

令和6年度 大学院特別講義 A・B

	A	B
4 公募	<p>開催日時：令和6年6月11日（火）18時00分-19時00分 開催方法：教育棟2F 講堂 演題：「分子生物学から出発したがんの診断、治療、予防を目指す研究」 講師名：村上 善則(先端医学研究所 分子生物学部門 特命教授) 講演内容：がんは1981年以来、日本人の死因第1位を占めているが、年齢調整死亡率は多くのがんで減少傾向にあり、臨床、基礎研究の成果が示されつつある。しかし、進行がんは依然予後不良で、早期の予防、診断、治療に加え、浸潤や転移を抑制する新規対策が望まれる。演者は1983年に医学部を卒業し、短い臨床経験の後、がんの分子生物学的研究を開始し、国立がん研究センター、東京大学等で、がんの遺伝子、ゲノム研究に携わり、本年4月より先端医学研究所にて研究する機会を戴いた。現在進めている細胞膜タンパク質を標的とするがんの診断・治療の研究、新規免疫チェックポイントの研究、そしてゲノム多型に基づく個別化予防について概説したい。 主催分野：分子細胞構造学分野</p>	<p>開催日時：令和6年9月10日（火）18時00分-19時00分 開催方法：教育棟 講義室3 演題：「ニューロクリティカルケアにおける脳神経モニタリング」 講師名：Prof. DaiWai Olson(University of Texas Southwestern Medical Center,USA) 講演内容：ダイワイ・オルソン先生には医学・看護学の視点からの神経診察とモニタリングの重要性についてご講演をいただきます。特に自動瞳孔計を用いた国際研究（End-Panic Study）等、メディカルスタッフの皆が使用できる神経モニタリングの基礎をご説明いただきます。看護学の立場からLancetやNEJMのレビューアをも担っているDaiwai先生に、臨床研究の神髄を伺うよい機会でもあります。 主催分野：救急医学分野</p>
5 委員指名	<p>開催日時：令和6年9月12日（木）18時00分～19時00分 開催方法：教育棟 講義室3 演題：「免疫チェックポイント分子PD-1の機能を制限する機構の発見とその応用」 講師名：岡崎 拓(東京大学 定量生命科学研究所 分子免疫学分野 教授) 講演内容：抑制性免疫補助受容体PD-1の機能阻害によるがん免疫療法、いわゆる免疫チェックポイント阻害療法の成功により、がん細胞に特異的なT細胞の活性化がPD-1によって抑制されていること、およびPD-1の機能を阻害することによりそれらを活性化してがんを治療し得ることが明らかとなった。一方、PD-1の機能を誘導・増強することにより、自己の組織に反応するT細胞の活性化を抑制して自己免疫疾患を治療できると期待されるが、PD-1の機能を誘導・増強する方法の開発は期待通りには進んでいない。本特別講義では、近年我々が見出したPD-1の機能を制限する機構および本機構を標的とした自己免疫疾患に対する新規治療戦略について紹介する。 主催分野：細胞生物学分野</p>	<p>開催日時：令和6年10月28日（月）18時00分～19時00分 開催方法：教育棟 講義室3 演題：「Perioperative therapy for lung cancer」 講師名：Heather Ann Wakelee, M.D. (Professor and Chief, Division of Oncology, Department of Medicine,Stanford University, Stanford Cancer Institute Visiting Professor, Department of Pulmonary Medicine and Oncology,Graduate School of Medicine, Nippon Medical School) 講演内容：Heather Wakelee教授は2017年にスタンフォード大学教授に就任され、肺癌などの胸部悪性腫瘍に対する薬物療法を専門とする世界的に有名な内科医、臨床腫瘍です。これまでEGFR, ALKなどのドライバー遺伝子変異陽性肺癌に関する分子標的治療薬の新規の知見に加えて、早期非小細胞肺癌に対する周術期治療の臨床試験・治験を主導・牽引しています。2019年より世界肺癌学会理事長を務められ、肺癌薬物療法のprecision medicineの推進などに尽力され、多大な貢献をされております。2024年より、本学客員教授に就任されました。今回、日本肺癌学会学術集會に合わせて訪日され、肺癌に対する周術期治療の最新の話題に関してご講義いただきます。 主催分野：呼吸器内科学分野</p>
6 後期公募	<p>開催日時：令和6年12月6日（金）18時00分～19時00分 開催方法：講堂 演題：「Real-time IntraVital Microscopy (IVM): In Vivo Cellular-level Imaging of Internal Organs in a Live Animal」 講師名：Pilhan Kim(Professor,Graduate School of Medical Science and Engineering,Korea Advanced Institute of Science and Technology (KAIST), Republic of Korea) 講演内容：本講義では、韓国KAISTのPilhan Kim教授に、リアルタイムで動物体内の臓器を細胞レベルで観察するIntra-vital imaging技術についてご紹介いただきます。この技術は、生体内の細胞動態や細胞間・細胞-微小環境間の相互作用を可視化し、従来の実験手法では困難であった病態生理学的情報の取得を可能にします。特に、遺伝子発現やタンパク質活性、細胞動態、細胞間相互作用、さらには外部刺激に対する生理的応答を生体内で直接観察することができます。また、この技術は新規治療法や診断法の開発にも有効であり、様々なバイオ医薬品の標的細胞への送達や薬効モニタリングにも応用できます。本講義では、生体内の各種臓器における病態生理学的情報の取得を可能にするIntra-vital imaging技術とその応用例についてご説明いただきます。 主催分野：分子細胞構造学分野</p>	<p>開催日時：令和6年 9月 2日（月）18時 00分～ 19時 30分 開催方法：橘桜会館2階 橘桜ホール 演題：「形成外科医のための皮膚腫瘍摘出術講座 実践トレーニング」 講師名：青木 律(グリーンウッドスキンクリニック立川 院長、日本美容医療協会理事 日本医科大学形成外科学教室 非常勤講師) 講演内容：皮膚腫瘍摘出の際のデザインや縫合の仕方は非常に重要です。症例によって腫瘍の形状、大きさ、位置が異なるため、それに応じた最適な手術法を選択できるようになることが求められます。今回の講義は、大学院生、皮膚科医、形成外科医、研修医、学生と幅広い対象者に向けたもので、インタラクティブなライブ講義となっています。参加者が実際に手術のデザインを行い、演者がそれに対してコメントを行うという実践的な形式を取ることで、プロフェッショナルの手術に対する思考法を間近で体感できます。 主催分野：形成再建再生医学分野</p>

令和6年度 大学院特別講義 A・B

		A	B
7	後期公募	<p>開催日時：令和6年11月13日(水)18時00分～19時00分 開催方法：教育棟 講義室3 演題：「臨床応用を見据えた遺伝子改変ブタからの最新の異種移植研究」 講師名：山田 和彦(ジョンズ・ホプキンス大学 外科 教授・Director, Xenotransplantation Program) 講演内容：山田和彦教授は昭和62年に日本医科大学を卒業され、本学、泌尿器科学講座に在籍、1996年からはアメリカ合衆国のマサチューセッツ総合病院/ハーバード大学医学部に留学、移植免疫学や異種移植研究を継続され、2015年7月にはColumbia大学 外科学の教授、2022年には異種移植の臨床応用を計画されているジョンズ・ホプキンス大学から異種移植プロジェクトリーダー・外科学教授として招かれ、世界の第一線で活躍されています。本学の大学院生や教員に向けた、アメリカでの研究生活やブタ臓器を用いた最先端の異種移植研究のご講演を頂く予定です。 主催分野：解析人体病理学分野</p>	<p>開催日時：令和6年 10月 28日(月) 18時 00分～ 19時 30分 開催方法：橘桜会館2階 橘桜ホール 演題：「創傷治癒 今までと、これから」 講師名：松村 一(東京医科大学 形成外科学分野 主任教授) 講演内容：松村一先生は、東京医科大学形成外科学分野の主任教授として、「創傷治療」に関する豊富な経験と知識を持つ第一人者です。創傷治療に関連した各デバイス(人工真皮、創傷被覆材、陰圧閉鎖療法など)を日本に導入する際に、薬事承認や保険収載にも長年尽力されてきました。また、多くの臨床治験に関わっており、各デバイスの作用機序や治療成績にも精通しています。 今回の講義「創傷治療～今までと、これから」は、創傷治癒研究に携わっている大学院生、創傷を扱う臨床医、研修医、学生を対象に、創傷治療の基礎から臨床まで精通した松村先生に、創傷治療の発展と未来への道筋を照らしていただきます。 主催分野：形成再建再生医学分野</p>
8	医学研究科長指名	<p>開催日時：未定 開催方法：未定 演題：「大学院を卒業して後輩に何を伝えるか？ -大学院での後輩教育から自身のキャリア形成まで-」 講師名：小川 令 副医学部長(日本医科大学 形成再建再生医学分野 大学院教授) 講演内容：大学院教育における教授方法やキャリア形成について大学院生を対象とした講義を行い、人材育成を行っていく。</p>	<p>開催日時：令和7年2月8日(土) 開催方法：(対面) 附属病院 地下1階 会議室A・B 演題：「令和6年能登半島地震を振り返る(仮)」 講師名：瀬島 照弘(石川県能登町 小木クリニック院長) 講演内容：瀬島先生は発災直後に小木中学校避難所で救護班を立ち上げ、けが人の治療にあたり、翌朝にはクリニックを開き、丸2日、文字どおり1人で700名の避難者の医療支援にあたる不眠不休の孤軍奮闘をなさいました。日本医科大学附属病院医療チームもAMAT先遣隊として、小木中学校避難所に1月2日に入り、ご支援をさせていただきました。今般、瀬島先生を日本医大にお招きし、災害医療のリアルや、また1年たった能登の現状から得た教訓など、ご講演をいただきたいと思ひます。 主催分野：救急医学</p>
9	医学研究科長指名	<p>開催日時：令和6年11月26日(火) 18時00分～19時00分 開催方法：済生学舎1号館 2階 講堂 演題：「『分子標的薬の開発にいたるがん遺伝子研究の歴史(仮)』」 講師名：仙波 憲太郎(早稲田大学理工学術院 先進理工学部 教授) 講演内容(仮)：1980年代から本格化したがん遺伝子ハンティングにより、正常な細胞をがん細胞に形質転換させる「がん遺伝子」が数多く発見された。生物の発生や細胞の増殖や分化といった生命現象のインフラともいえる遺伝子の発見とその研究は、発がん機構の理解だけでなく、様々な生命現象の解明に貢献した。続いて、今世紀のゲノム解析技術の発展は、がん患者ごとにがんの性質を理解し、それに合わせた治療法を開発する潮流を生み出している。この講義では、演者が所属した研究室におけるがん遺伝子の発見の経緯から、現在行っている研究までを紹介したい。 主催分野：アレルギー・膠原病内科学</p>	
10	医学研究科長指名	<p>開催日時：令和6年12月23日(月) 18時30分～19時30分 開催方法：済生学舎1号館 2階 講堂 演題：「腸内細菌代謝産物による免疫細胞の遺伝子発現制御とアレルギー性・炎症性疾患への効果」 講師名：西山 千春(東京理科大学 先進工学部・生命システム工学科 教授) 講演内容：食物繊維が腸内細菌によって代謝される際に産生される短鎖脂肪酸が、アレルギー反応のエフェクター細胞であるマスト細胞の機能を調節することによって抗アレルギー効果を発揮することや、多価不飽和脂肪酸が乳酸菌の代謝を経て抗炎症性作用を獲得することなど、私たちの研究成果を中心に、食が宿主の免疫恒常性維持に寄与する分子機構を紹介させていただきます。 主催分野：アレルギー・膠原病内科学</p>	

令和6年度 大学院特別講義 A・B

	A	B
11	<p>開催日時：令和7年1月24日（金）18時00分～19時00分 開催方法：対面方式（済生学舎1号館 2階 講堂） 演題：「適応信号処理研究室の医療分野への取り組み ～ 微細な動態解析と可視化による機械学習の評価 ～」 講師名：田邊 造（公立諏訪東京理科大学 工学部情報応用工学科 教授） 講演内容：これまで、日本医科大学心臓血管外科との共同研究では、iPS細胞培養中の細胞拍動解析や心臓超音波検査による心筋梗塞の解析に始まり、近年では造影剤を使用しないCT検査画像による大動脈解離の診断方法の開発や小児心臓術前術後の腸音解析などの解析と一緒に研究をさせて頂いている。本講演は、拍動するiPS細胞や心臓超音波画像の心室壁や心臓弁の動態解析における意味のある特徴量の可視化に加えて、その特徴量を用いた評価判定のための機械学習について紹介する。本講演のポイントは、(1) 動態解析による有効な特徴量の考え方と(2) 特徴量を分かりやすく可視化方法であり、適切な特徴量の可視化はロバストかつリアルタイムな</p>	